国土交通省地域づくり表彰

ＮＰＯ法人　頴娃（えい）おこそ会（鹿児島県南九州市）

地域総力戦によるまちおこし

ＮＰＯ法人　頴娃（えい）おこそ会

観光プロジェクトリーダー

加藤（かとう）　潤（じゅん）

１．南九州市の概要

平成19年に頴娃町・知覧町・川辺町が合併して誕生した南九州市は、鹿児島県の薩摩半島南部に位置し、南は美しい景観を望める海岸線が続き、中部には基幹産業である農業を支える肥沃で広大な丘陵大地が広がる人口約37,000人の市です。

四季を通じ、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、茶とさつまいもは市町村単位で日本一の生産量を誇るなど全国有数の食料供給地であり、また、歴史・文化遺産を背景にした観光施設も数多く存在します。

一方で、人口減少が極めて深刻な状況であり、少子高齢化、農業の担い手不足、商工業の活性化、地域資源を活かした観光の推進等の諸課題の解決が急務となっています。

２．活動開始の背景・経緯

このたびの活動主体となる頴娃おこそ会の設立は平成17年のことです。小売店の廃業が相次ぎ、ますます地域衰退が進行する状況を憂えた商工会まちおこし委員会のメンバーを中心に、商工会の枠にとらわれない地域づくり活動を行おうとの機運が高まりました。大分県の竹田研究所への視察や、20回を超える会合を通じた議論の積み重ねの結果、農商工や官民の枠を超えたまちづくり組織の必要性を痛感、「いつまでも住みたいと思える魅力あるまち」をつくることを目指し、任意団体「頴娃おこそ会」の設立に至りました。平成19年には信用力強化と、さらなる活動の活性化に向けて、NPO法人への改組を経て、会員数は発足当時の25名から、現在では45名に拡大しています。

頴娃おこそ会は「地域総力戦のまちおこし」をモットーに活動を行っています。この発想の源は、現頴娃おこそ会幹部がまだ昭和の時代に商工会青年部長を務めていた頃、若手同士が組織の壁を越えた活動の必要性を感じ、町内の青年4団体で「寄せ鍋クラブ」という組織を立ち上げたことに端を発します。頴娃おこそ会の連携を重視する気風は、そうした長年のまちづくりへの想いの蓄積によって醸成されたものと言えます。

以後、頴娃おこそ会は「農業」・「芸術」・「エネルギー」・「観光」などプロジェクト単位で様々な事業に取り組んでいます。

３．観光誘致の芽生え～番所鼻公園～

頴娃町は観光地として知られる知覧や指宿と隣接しつつも、５年前までは町外来訪者もまばらな観光通過地でした。

番所鼻公園は江戸時代、日本地図作成の途中で立ち寄った伊能忠敬が「天下の絶景」と称賛した景勝地であり、昭和50年代には公園として整備されたものの、その後は雑草や雑木が生い茂る場所となっていました。

ここで観光活動の新風が吹き始めたのは平成22年、番所鼻公園へ埼玉からＩターンした兄弟がタツノオトシゴ養殖場を開設したことがきっかけでした。この養殖場を観光施設として公開したことを機に、頴娃おこそ会では園内への観光モニュメント「竜のおとし子・吉鐘」を設置しました。この鐘が公園のシンボルとして認知され、公園に賑わいが少しずつ生まれたことにより、こうした動向に呼応した行政が公園の再整備事業に着手、景観を望む広場や園路が整備されるに至りました。この結果「タツノオトシゴハウス」は観光施設として独り立ちを果たすとともに、番所鼻公園は短期間で年間7万人の来訪者を集める観光スポットに成長していきました。

「竜のおとし子・吉鐘」完成

４．点から線への展開～釜蓋神社～

番所鼻公園から車で５分と隣接する場所に釜蓋神社があります。平成24年、ロンドン五輪でなでしこジャパンが銀メダルを獲得した際に、主力メンバーが釜蓋神社を参拝し祈願していたことが、全国に報道されたことで注目を集めました。その名前から釜の蓋を頭に乗せて祈願するユニークな「釜蓋願掛け」が人気を呼び、パワースポットとして評判となりました。

頴娃おこそ会では、番所鼻公園と釜蓋神社を紹介した「頴娃パワースポットマップ」を作成し配布するなど、番所鼻公園・釜蓋神社間の連携策を取り、これをきっかけに両スポットを合わせて紹介する新聞記事が掲載され来訪者が急増しました。

来訪者増加は喜ばしいことながら、あまりに急激な観光地化進展により、問い合わせ対応や看板、駐車場、トイレ不備などの課題が露呈し、管理する地元公民館に苦情がもたらされる様になりました。この対応として、頴娃おこそ会の声掛けにより住民、行政、観光協会を始めとする地域団体で「釜蓋まちおこし会」が結成され、看板設置、パンフレットの作成配布、日曜朝市の実施など、釜蓋神社を核とした観光活動の展開が図られることとなりました。

今では指宿・知覧周遊と組み合わ

せた薩摩半島の定番観光スポットとして年間 15 万人を集めるまでになりました。

正月の釜蓋神社

５．農業との連携～大野岳～

番所鼻公園・釜蓋神社への観光来訪が定着化する中で頴娃全域の活性化を目指す頴娃おこそ会が次なるスポットとして目を付けたのが、周囲一帯を茶畑に囲まれ、素晴らしい景観を誇りながらも来訪者がまばらだった「放置された景勝地」大野岳でした。大野岳は車で山頂付近まで上がれ、山頂展望台からは、茶畑を始めとする絶景が望める場所であり、ここに観光資源としての可能性を感じた頴娃おこそ会は、管轄する地元自治会に対し「大野岳を考える会」の開催をもちかけました。この会合で､同席した若手茶農家夫妻から｢茶寿」をコンセプトにした整備をとの発言がありました。茶寿とは喜寿、米寿と同様に長寿を願う言葉であり、108 歳の長寿祈願を意味します。夫妻からの提案は、大野岳の駐車場から山頂展望台までの間にある 60 数段の古い階段を 108 段に再整備することで大野岳を茶寿の山として売り出そうという大胆なアイデアでした。

夫妻の呼び掛けで若手農家を中心として「茶寿会」が結成され、茶畑を観光客に開放した茶畑ツアーを行うなど、お茶と観光を繋ぐ活動が次々と展開されました。市役所はこうした活動への支援として県に対し、108 段の茶寿階段の整備計画を要望、茶寿会結成からわずか１年で茶寿階段の設置が実現しました。階段完成後、茶寿会は活動をさらに活性化、茶畑ツアーはグリーン・ツーリズムならぬグリーン・ティーリズムという緑茶農家ならではの名称の独自ツアーとして進化しています。その後の着実な取り組みの結果、最近では月に 14 件のツアー受け入れ事例も出るなど、観光と農業の連携が浸透しつつあります。

６．ソフトとハードの融合と行政との連携

頴娃おこそ会では観光地化進展の過程で、出来ることは自分たちでやろうとの方針から、ボランティアガイドの実施や観光散策マップの自主作成など、多額の資金を伴わないソフト事業を次々と手掛けました。ソフト事業の実施は、活動に関心を持った若手メンバーが集い、プロジェクト経験を積むことで成長し、また新たなプロジェクトが始まるという好循環をもたらしました。また、活動は観光そのものを目的とはしておらず、観光を通じた地域活動の活性化を目指したことで、例えば、商工会メンバーがグルメプロジェクトを手掛けたり、商店主が商店街の活性化に取り組んだりという事例も生まれています。

また、番所鼻公園や大野岳など既に行政整備が進んだスポットにおいても、頴娃おこそ会が話題づくりのためのイベント開催やパンフレット作成を行い、行政と魅力向上に向けた施設改善策を協議し、これを受けた行政がさらなる整備事業を実施するなど、行政と民間が役割分担を行いつつもソフトとハードが融合した観光地づくりが行われています。

７．観光地づくりから地域づくり、人づくりへ

観光に端を発した活動は、昨今では地域づくりとも言える分野へ広がりつつあります。その一つが石垣エリアの商店街活性化プロジェクトです。古くは 100 店以上が軒を並べた繁華街・石垣商店街は、今では 10 軒程度にまで商店が減少しています。大野岳で活動する茶農家夫妻と同級生の石垣商店街の四代目呉服店主が刺激を受け、石垣においてまち歩きコースづくりやマップづくりなどに取り組むうちに、商店街の空き店舗再生活動に発展しました。これが県内にある大学との連携に繋がり、平成 27 年夏には 10 数名の学生が、2 週間公民館に合宿して改装作業に取り組みました。また、地域住民にも作業参加を促すという形式で、費用負担を抑えつつ築 100 年の古民家再生が進行するという事例も生まれています。

さらに、商店街は生活圏でもありながら、ビジネス拠点にもなりえることから、石垣エリアに重点を置いた移住・起業対策を模索していたところ、こうした活動に触発されて石垣に移住する若者が現れるなど成果も出始めています。疲弊する商店街の再生は容易な作業ではありませんが、安易なイベントなどに走ることなく、ここを拠点に活動する人を呼び込むことで人を基点とした基盤づくりから手掛けていきたいと考えています。

古民家再生プロジェクト

８．課題と展望

頴娃おこそ会の活動が活発となることは喜ばしいことながら、行政等との折衝、視察対応、事務処理など増大した業務に、限られた人員でどう対処するかが課題となりました。各々が本業を持つメンバーのボランティア運営に頼ってきた頴娃おこそ会にとって、組織成長の過程でぶつかる一つの壁でした。しかし、本年度より、県からの着地型観光モデル事業を業務委託として受け、頴娃おこそ会としては初めての専任スタッフの雇用が叶ったことで進展がみられました。もっとも民を主体とした自発的かつ柔軟な発想による活動が頴娃おこそ会の存在意義であることを意識しつつ、自主事業と行政事業のバランスを考慮して、行政との対等な連携関係を築くことが肝心であると考えています。

今後、これまで頴娃おこそ会が培ってきた観光と農業の連携という軸に、空き家、商店街、移住、起業といった現在挑戦中のテーマを組み合わせることを通じ、幅広い連携力を発揮することでより活発な展開を図っていきたく思います。